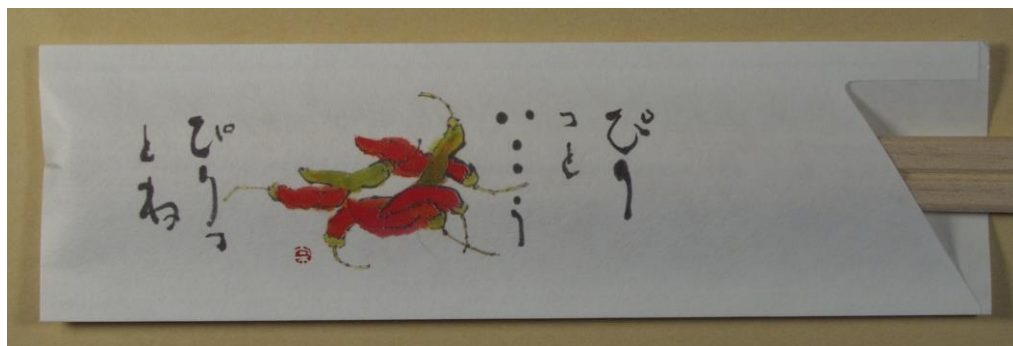


ちまたの文字資料 —箸袋の文字—

吉池孝一

一

これは、ある小料理屋の紙の箸袋である。唐辛子の絵の右に三行、左に二行、文字がある。ところで、右の第三行目、読めるであろうか。おそらく、瞬時に読む人と、いつまでたっても読めない人に分かれるのではなかろうか。わたしには、ただの点にしか見えない。省略を表した点にしか見えないのである。それにしても、いったいなぜこんなところに省略の点があるのだろう……。料理が出てくるまで、しばらくの間、箸袋をにらんでいた。そこで、となりに座った二人の知人に聞いてみた。やはり読めないようだ。さらに対面に座った家内に聞いてみた。「ぴりっといこう」「ぴりっとね」と即座に読んだ。そう言われて、改めて見直すと、横に並んだ二つの点と、縦に並んだ二つの点が、平仮名の「い」と「こ」に見えてくるのではないか。なぜ読めなかったのだろう。



二

となりの知人いわく「文字を読んだのではなく、ぴりっといこう、という言葉を手すぐに連想できたためだろうね」と。おそらく本質はそのあたりにあるのか。やや大げさな言い方をすると、点が言葉を暗示し、言葉として読んだ瞬間に、点が文字としての機能を獲得したのである。もっとも、これは私の場合に、このような理解の経緯であったということである。家内は初めから文字として読んだのかもしれない。「ぴりっといこう」という言葉（音声の連続）と横に並んだ二つの点と、縦に並んだ二つの点が即座に結びついたのであろう。

三

ところで、この文字を書いた人は、なにを思って、この文字を書いたのだろうか。おそらく、謎かけのためではなかろう。読ませないために書いたのではなく、何の問題もなく読むであろうという前提のもとで書いたにちがいない。私のように読めない人種がいることなど、思いもよらないのであろう。小料理屋の箸袋に、文字の本質にかかわる問題と、コミュニケーションの危うさを見た次第である。